



特別  
A12  
5127  
19



東屋  
浮舟

一葉抄 第十

東屋

卷名も哥歌りて号はと世重二十五

采風しりものまのまのまのまの一年

乃りなり秋八月のらりら九月

この事あり

はくち山歌

は舟の君ハ号陸ちり

まろりりまをはくち山とらりり

入りハさんらりらりらりらりらり

らありらりらりらりらりらりらり

のむらとらりらりらりらりらり

いづれもさういふ事なるといふ事  
の事なるといふ事なるといふ事

あつた事とせり縁なりぬらん  
とていふ事なるといふ事なるといふ事

りくひもゆさぬれぬ事  
あつた事とせり縁なりぬらん

ゆさぬれぬ事  
あつた事とせり縁なりぬらん

くさんや  
あつた事とせり縁なりぬらん

ん出た将  
あつた事とせり縁なりぬらん

ちおハ先づ能く  
あつた事とせり縁なりぬらん

内教坊 内教坊ハ大との許れり  
あつた事とせり縁なりぬらん

有る人衆なるものあり  
あつた事とせり縁なりぬらん

りくひもゆさぬれぬ事  
あつた事とせり縁なりぬらん

あつた事とせり縁なりぬらん  
あつた事とせり縁なりぬらん

あつた事とせり縁なりぬらん  
あつた事とせり縁なりぬらん

蝶のふゆり

ほいさうさく  
ふんののー  
見やむ

又云 儀ヨシ静シラカメ體テイ用ミヤカク 伊勢物語見は

あは清方シヨウヘあり  
家のよし

あは清方あり  
家のよし

まじり

あは清方あり  
家のよし

あは清方あり  
家のよし

あは清方あり  
家のよし

人あは清方あり

あは清方あり  
家のよし

あは清方あり  
家のよし

あは清方あり  
家のよし

あは清方あり  
家のよし

あは清方あり  
家のよし

あは清方あり  
家のよし

あは清方あり  
家のよし

あは清方あり  
家のよし

あは清方あり  
家のよし

あはれまうぬきしころのたろうへ  
おくおく 大層なるおれんは物  
おれり申せぬおれ

りおろし方せ 帝隆のいじあをよ

少言腹りれしころのいぢあぬとこ

中れこのこ ちあらの君れりおれい  
の中の見とらり

中のおしめ 元きらのころみろ

ほくしとよられ又言はる言はる  
あまのころんもなましおれりし  
ころくおれらるおしめおれりし

母のあはれおれりし

よくおれおれりしあはれ ちあらの

君のりおれりし

あはれいしたよろしとらあ

あはれのいぢあぬおれあはれおれい  
あはれしとらあ事とら又とらあ  
あはれあはれいぢあぬあはれあ  
りやとらあ

大木屋敷 久言りりおれりし

あはれあはれりよとらああはれあはれ  
あはれあはれりよとらああはれあはれ

このあれ方とて、ふおれ君の言り  
ふおれ君とて、おれはあつとんとち  
うらふらり

さういふ まふひかりうらり

清方ハ、あつとんと、ふおれ君の

いれは、あつとんと、あつとんと、あつとんと

ふおれ君の、中君れおれ

あつとんと、あつとんと、あつとんと

あつとんと、あつとんと

あつとんと、あつとんと

あつとんと、あつとんと

これ清方り、ふおれ君の、あつとんと

い清方とて、中君の清方れ人つと

あつとんと、あつとんと、あつとんと

あつとんと、あつとんと

あつとんと、あつとんと、あつとんと

あつとんと

あつとんと、あつとんと、あつとんと

あつとんと、あつとんと

あつとんと、あつとんと、あつとんと

あつとんと、あつとんと、あつとんと

あつとんと、あつとんと

武郡通して美人なり 常陸ちよ子

あり之位蔵人の成り蓋とひけきり

りりし

あら通こハりふんそ 中馬のりそ

ささの世れ登りりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりり



百くしをせぬく心し 中君れ母をりて  
中の出させまのひのくゆけし

ゆきふしをすくせりてしを山うて  
うきてしをすけしをすけりしをすけりし  
せぬのあめと中君は下めては  
舟の舟れりしなり

舟れとよひとらま 中君の父母  
のりていしゆりてはゆきせぬりて  
せぬりて 中君のちをえりて  
ゆきとてゆきせハ中君もも  
ゆきりとりしなり中君のり

一しよらとやとせぬハさもあししとて  
かゝの物と 兄オヤルヤとてわね  
りさるるなりししうて

しよらとやとせぬハさもあししとて  
らよふらぬしき 中君のしとら  
じきしうのくみ 中君は中君は  
きくこせりぬきまのよわしよとて  
まゆけりしやとて

人よあまほしき 中君のしとら  
浮徳の 常徳とて中君のしとら  
あり但安よとらハ徳徳のりなり



ハカリキリノミ

今更の世を世 世より今たりし何よ

りくやそれ 今更の世を世よりけよん

をまゝくしん又おろわそん

ほろくしをせぬし ぼ舟の母を

つとぬしとくろおせしゆい

船のちのちのちのれんとして中より

ありそんとおのり

舟のふらりりん ちしおん

ふのふくしとくろおせしゆい

くらの実よりしてりて流る

流後川せいのん 中更の世より

りておの流をわたりしゆい

引てあまの ちのちのりよあまのりり

のしゆいしとくろおせしゆい

ほろくしをせ ちのちのりよあまのりり

流てはぬしゆい

りくやそんおしゆい

らぬ事よのり

りしゆい ちのちのりよあまのりり

くはりそん ちのちのりよあまのりり

らぬ事よのり



あまのこゝろのふらふらと

ふかきつらふかきつらと

おのほろほろと屏風をのぞく

うらやまのこゝろ

しらけりしつらとふらと

しらけりしつらとふらと

しらけりしつらとふらと

とほろとふらとふらと

とほろとふらとふらと

とほろとふらとふらと

とほろとふらとふらと

おどろ

中君の言の女房ともほ

おどろおどろおどろおどろ

おどろおどろおどろおどろ

おどろおどろおどろおどろ

おどろおどろおどろおどろ

おどろおどろおどろおどろ

おどろおどろおどろおどろ

おどろおどろおどろおどろ

おどろおどろおどろおどろ

おどろおどろおどろおどろ

おどろおどろおどろおどろ

うらなひありて 白まれば海舟の音ひ入れ  
まじりたりしうらなひは 白まれば音ひ入れ  
まじりたりしうらなひ

平らげれば 白まれば

あやめしめく 白まれば音ひ入れ

ふいてうらなひまじりて音ひ入れ

白まれば音ひ入れの音ひ入れ

中務ま 白まれば音ひ入れ

ちまひ 中まちまて音ひ入れ

舟車引物 中務ま音ひ入れの音ひ入れ

舟車引物 中まちまて音ひ入れ

舟車引物 白まれば音ひ入れ

舟車引物 白まれば音ひ入れ

舟車引物 降魔相 白まれば音ひ入れ

舟車引物 白まれば音ひ入れ

舟車引物

舟車引物 舟の音ひ入れ

舟車引物 舟の音ひ入れ

舟車引物 舟の音ひ入れ

舟車引物 舟の音ひ入れ

舟車引物 舟の音ひ入れ

舟車引物 舟の音ひ入れ

ほいよまゝにまゝにまゝにまゝに  
利をよあつりまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝに

いららるるや け裏へ及ぶの地を

しらしてかゝの門よりまゝにまゝに  
舟の位はまゝにまゝに

物の終りはまゝにまゝに いか餘情を

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝに

まゝに馬 けし、鞍を官よりしては

まゝにまゝに

まゝにまゝに 中宮のまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝに け裏へ及ぶの地を

このまゝにまゝにまゝにまゝに

あいままゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに 舟

右近のふもふらふらして八段の  
の法中書の法まじりてハえらふ  
ぬまぬまあり

びーの法うらりの属よ 婦志の  
いへるやふとてつひあいに申ハ

中書のいふふの法と移んらよる  
いふふの法とつりぬらふいふ  
まのりらふらふら

あつてはあふぬ ちひれもあつて  
あふらふの法はあつてもあふらふ

中書のいふふの法はあつてもあふらふ  
あつてはあふぬ ちひれもあつて  
あふらふの法はあつてもあふらふ

あつてはあふぬ ちひれもあつて  
あふらふの法はあつてもあふらふ

あつてはあふぬ ちひれもあつて  
あふらふの法はあつてもあふらふ

あつてはあふぬ ちひれもあつて  
あふらふの法はあつてもあふらふ



いひこみしりてはあはれもいとすまし  
さしはたかきひくくさしをなほくは

下河よはたきつとあはれし中意のたき  
せしむりつとあはれしあはれしつ  
くさしはあはれ

あはれしつとあはれしつとあはれ  
あはれしつとあはれしつとあはれ

あはれしつとあはれしつとあはれ  
あはれしつとあはれしつとあはれ  
あはれしつとあはれしつとあはれ  
あはれしつとあはれしつとあはれ

あはれしつとあはれしつとあはれ  
あはれしつとあはれしつとあはれ

あはれしつとあはれしつとあはれ  
あはれしつとあはれしつとあはれ

あはれしつとあはれしつとあはれ  
あはれしつとあはれしつとあはれ  
あはれしつとあはれしつとあはれ  
あはれしつとあはれしつとあはれ

あはれしつとあはれしつとあはれ  
あはれしつとあはれしつとあはれ

あはれしつとあはれしつとあはれ  
あはれしつとあはれしつとあはれ  
あはれしつとあはれしつとあはれ  
あはれしつとあはれしつとあはれ

あはれしつとあはれしつとあはれ  
あはれしつとあはれしつとあはれ

こけおゆか〜

こけおゆか〜

こけおゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

おゆか〜

しんじやうしやうし

くわん人ハまじて 浮舟をひらけ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちやまはしんじんこの母のこゝろ

あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに  
あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

また後一人でうららの帝と書よ  
うららの信水のこころぞうらら  
の心ゆふこのこころんぬ

あつこの聖 押下純信正真御愛

若山高丸此巻よ入て上二年秋名  
と信濃帝のせとまうしりきく  
のころも かたがは 又ハら事して

あつこの聖のころの聖は 利生のあ  
ふせのころあつこのころ

人よはるや え 人よはるのこころは  
まはりあつと 景物のゆきをか

あつこの聖 あつこの聖 信すのころ

らつこのころの信すのころ あつ  
まうてふし

らつこのころ あつこの聖 信すのころ

あつこのころの信すのころ あつこの聖  
のゆふい あつこの聖 信すのころ

あつこのころの信すのころ あつこの聖  
ひらき あつこの聖 信すのころ

あつこのころの信すのころ あつこの聖  
あつこのころの信すのころ あつこの聖

あつたまゝのうゑに  
つたまゝのうゑに  
つたまゝのうゑに

又之 伊賀伊豫の  
とまのしりし

平野社本社よ  
振有り  
いづれ  
まゝ  
いづれ  
まゝ  
いづれ  
まゝ  
いづれ  
まゝ

まゝ

いづれ  
まゝ  
いづれ  
まゝ

いづれ  
まゝ

いづれ  
まゝ  
いづれ  
まゝ

いづれ  
まゝ  
いづれ  
まゝ

いづれ  
まゝ  
いづれ  
まゝ

いふもあはれんこと　ふもあはれんこと  
うらやま　　いふもあはれんこと  
うらやま　　いふもあはれんこと　　丹后

の何のうらやまあはれんこと

うらやま　　いふもあはれんこと

この後の　　いふもあはれんこと　　丹后

うらやま　　いふもあはれんこと　　丹后

このあはれんこと　　いふもあはれんこと

いふもあはれんこと　　いふもあはれんこと

いふもあはれんこと　　いふもあはれんこと

いふもあはれんこと　　いふもあはれんこと

いふもあはれんこと　　いふもあはれんこと

いふもあはれんこと　　いふもあはれんこと

いふもあはれんこと　　いふもあはれんこと

いふもあはれんこと　　いふもあはれんこと

いふもあはれんこと　　いふもあはれんこと

いふもあはれんこと　　いふもあはれんこと

いふもあはれんこと　　いふもあはれんこと

いふもあはれんこと　　いふもあはれんこと

いふもあはれんこと　　いふもあはれんこと

かゝらぬめあつらすかゝ 秋のあはれ

いふ人への多はいんともくらまは

あはれにら

おつゆいれまゝ けららのつゆくゝる染

のゆかたをぬきけりけりしあはれ

ありまゝうーさきりら

きつのもろは 轉蓬と車ひくゝるあはれ

あつたきつのもろはの着ゝあはれ

あはれにら 転蓬と車ひくゝるあはれ

あはれにら

あはれにら 中巻のあはれ

て井戸のらゝあはれにら

あはれにら

あはれにら 一人は井

あはれにら

あはれにら

あはれにら 車の中

あはれにら

あはれにら

あはれにら

あはれにら

あはれにら





女君の侍もいなりハ、まのいぬま

おくり居着のふりよりおらあり

まの侍ハ、女にまの侍ハ、おら

しハ、まの侍ハ、おら

まの侍の髪は日毎、おら

ワ、まの侍ハ、おら

まの侍ハ、おら

まの侍ハ、おら

まの侍ハ、おら

まの侍ハ、おら

まの侍ハ、おら

まの侍ハ、おら

班女固中秋扇也楚王臺上夜望

おら

まの侍ハ、おら

まの侍ハ、おら

まの侍ハ、おら

まの侍ハ、おら

まの侍ハ、おら

まの侍ハ、おら

まの侍ハ、おら

まの侍ハ、おら

此の共人すしめし月首掛  
りりともあつる准り  
里れり昔あり  
りすし月首掛あり

浮舟

春名ハ舟として号と東屋春ハ  
かひハぬ氣乃九月まで此りあり  
春名二十六歳の正月より三月  
この事あり  
かれとられぬ中へ  
お君御うあつたぬあり  
いひしりあり  
ふりしりあり

ていへばおのれは

おのれは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

侍し申すは

そのころの可成りにあつたものなほ

For a number of years in the past

(The same of the same thing)

そのころの中書り

しつりあつたものなほ

あつたもののなほ

そのころの中書り

年月であつたものなほ

そのころの中書り

中書りのものなほ

そのころの中書り

其後年月とて

そのころの中書り

そのころの中書り

そのころの中書り

そのころの中書り

そのころの中書り

そのころの中書り

そのころの中書り

そのころの中書り

そのころの中書り

そのころの中書り

書をくみ交はる見たりとてこまゆ  
あはれしきり

この巻ハ 金として元けと作りて録  
書かへ女よりきりきり

とてしんよ けりきり  
しんよのあはれと かのあはれ  
これぬりきり

年あはれきりて 右道へ去つりて  
ふの白くちとハ浮舟の女房りり  
あはれにのりきり かのあはれ  
のあはれきりきりきりきりきり

あはれきりきりきりきりきり  
あはれきりきりきり

けりきりきりきりきり かのあはれ  
あはれきりきりきりきり

まゆり 持統天皇三年三月天皇御  
万國前殿し卯ち字寮杖八十枚年中  
行事云三月上卯日侍杖事 以て

日春宮致秋卯杖古進着服陣付殿  
人進々次方舎人進卯杖 か系中有  
居杖状 其料  
糸卯提巾机紐并縫履敷料十兩

二八 三河系 結紐料七匁うら 丹波系

こと申請納殿差人取付書付張

懸角に割三納本がね槌末出の月許

おのれ許すの 白まね許すなり

まのちりふくらね 花木の枝山くら花と違

ちりて卯槌と枝よつわぐらぬりり

ゆぬちぬ物よあま まのちりぬと

まのちりぬくら入くらぬりらぬ力り

ゆぬちぬぬくらあまぬりりしと

らぬぬくらぬくらぬくらぬくらぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

かおるし 中表の女房

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

○ 沙文ハ後うつてなるもの事なりたはれハ  
或る物道なり

殿井しりあてをうつ 沙庄の人々  
のれ書なるつとんり

いそしとあぬまあむ 後舟中書と

ふしそあやうまのり  
りいりねるはううく

ふはうして 中書のかうして  
のり回書 賭らと云る陽殿し

ふしてらは沙流んすりり仲書し  
是のりハ礼記なりしゆりや是

長古出書長古を流と射の舎人との

射ゆりり長古大将射子の奏はら  
方を流の管飲とあはしと後

射の流舎とあはしとありあり  
云内書のハ内と節會なり仁書殿と

ひとりり流く 年中記事 賭ら 白ま

旧宴 紅葉の  
加のま

はうのり 妻は除目とあはし

いそしとあぬまあむ 官位とらひ

文の流くよりあんと 中ら



有りてはしるべき人にていふはあつた  
りりえあつし

花人よりくちりえあつた 二位花

人のぬけよりりりえあつた

や、申 心をまゝにあり

いふは あつたつてかりたつた

のたまひやらつしつりりあつた

あつたつた

ちとつたつたし人であり 東屋書

あつたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつた

あり其右通つたつたつたつた

房じりつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつたつた

ぬいの片言 中義のめい

おれり ねり

とまひりやえ海ほを流し 海舟

母をくましてあふあふまきとんと

せし水ののりり

中く猿くらまて 糸のあつかり

てふのうらまし

又ふハ後よりくして 又あり女

房の記とらりくひかおれ

は中との 海舟のうらま

あふのうらまきとんと

ふゆのひてとらゆら糸とて乃

とらひりりて母のあつかり

うらまのうらま

うらまのうらまありさ 中義の片言

うらまのうらまありさ

うらまのうらまありさ

うらまのうらまありさ

うらまのうらまありさ

うらまのうらまありさ

うらまのうらまありさ

うらまのうらまありさ

りふらりれろく 親縁しつりる親

れりらんらん

あてりらんらん 上馬一いこ

あはぬ ちあち補仲信はんらん

あかんありち内記道定らんらん

まらぬらんぬまよとてしよらんぬらん

みまひて 義孝女おらんらん

きんぬ致平親をまらりてやねあ

らんらんらんらんらんらんらん

付てんのらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらん

このあかんよつれて

からりりりりりりりりりりりりりり

ぬまらんらんらんらんらん

例乃愛らんぬ 業の侍佐の人

らんらんらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらん

いららんらんらんらんらんらんらん

け世のあらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらん

らんらんらん

らんらんらんらんらんらんらん

それじりしそこ下お遊つらん

あしかりしりよ 昔よまのこゆ

たぬのーまのりりり

人のちゆの事ハハ 人のちゆの事ハハ

そのまぬ流らんりりりりり

くま流じつよ 右近りりりりり

秋八月あり 白雲の流らんりりりり

あまふりりりりりりりりり

山りりりりり 後野中りりりりり

の流らんりりりりりりりりり

りりりりりりり 右近りりりりりり

あまふりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりり

らりりりりりりりりりりりり

忠の事あり

ゆりりりりりりりりりりりり

事りりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりり

まひりりりりりりりりりりり

らりりりりりりりりりりりり

けのりりりりりりりりりりり

あまふりりりりりりりりり



車あり五津のたましき新らあしほりり、  
とらねあしほりり、たましとあつり  
あつりしほり

あつりの人と見せしきあつり人  
あつりしほり

あつりのあつりしほり  
あつりしほり

あつりしほりあつりしほり  
あつりしほりあつりしほり

あつりしほりあつりしほり  
あつりしほりあつりしほり

あつりしほりあつりしほり

あつりしほりあつりしほり

あつりしほりあつりしほり

あつりしほりあつりしほり

あつりしほりあつりしほり

あつりしほりあつりしほり

あつりしほりあつりしほり

あつりしほりあつりしほり

あつりしほりあつりしほり

あつりしほりあつりしほり

あつりしほりあつりしほり

孰のいふ方なりり月夜にあり

も夏の夕夜とあるありと

女位二人 一人は女おしちん

女君のりしかりし 中巻のりし

うらうら 白雲の流しし葉あり

人のいふぬん ちりの中巻しか、

ほひおきまるときんしおきまるとき

まじりおきつらしおきあひのりし

くしおきおきりおきまると

らつらよ飛らこらしちりし人もあひ

らおきん ちりしちりしちりしちり

てくしちりしちりしちりしちりし

あまししちりしちり

うしちりしちりしちりしちりしちりし

ちりしちりしちりしちりしちりし

あまのちりしちりしちりしちりし

ちりしちりしちりしちりしちりし

ちりしちりしちりしちりしちりし

すちりしちりしちりしちりしちりし

ちりしちりしちりしちりしちりし

ちりしちりしちりしちりしちりし

ちりしちりしちりしちりしちりし

と申の通り一々の事御の心ごと  
御行の通り行なはれり申す  
申すにありてまゝ申し候へども  
おくは方の心御心  
らりやう一尾く 言書せり候へども  
心より御心御心御心御心  
御の御心御心 御心の御心御心  
と申すにありてまゝ申し候へども  
おくは方の心御心  
らりやう一尾く 言書せり候へども  
心より御心御心御心御心

右大将 御心御心

右大臣の御心御心 御心の御心御心  
と申すにありてまゝ申し候へども  
おくは方の心御心  
らりやう一尾く 言書せり候へども  
心より御心御心御心御心  
御の御心御心 御心の御心御心  
と申すにありてまゝ申し候へども  
おくは方の心御心  
らりやう一尾く 言書せり候へども  
心より御心御心御心御心  
御の御心御心 御心の御心御心  
と申すにありてまゝ申し候へども  
おくは方の心御心  
らりやう一尾く 言書せり候へども  
心より御心御心御心御心



申すの事なればやうせんりちの

あしあしとせりてはし 董大翁の

しんじんありて感

すの事なればやうせんりちの

あしあしとせりてはし

しんじんありて感

すの事なればやうせんりちの

あしあしとせりてはし

しんじんありて感

すの事なればやうせんりちの

あしあしとせりてはし

申すの事なればやうせんりちの

あしあしとせりてはし

あしあしとせりてはし

あしあしとせりてはし

あしあしとせりてはし

あしあしとせりてはし

あしあしとせりてはし

あしあしとせりてはし

あしあしとせりてはし

あしあしとせりてはし

あしあしとせりてはし

おき歌よあそびんせりよりて

ゆきゆきとまの ぬきの中まはしゆ白

あそびとまのぬき ぬきと一服あり

あそびのぬきとまのぬき ぬきの中まのぬきと

ゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

ゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

あそびゆきゆきとまのぬきとまのぬきと

い院より一巻と

中二二二二

六条院より一巻と

氏のまはし後六条院より一巻と

やういふ所の巻より一巻と

凡六条院首の巻より一巻と

久壽宮

源氏の巻より一巻と

出雲御所より一巻と

白雲の巻

あつたこの一巻のありきなり

文内より一巻と

中二

の巻より一巻と

いまより一巻と

白雲の巻

文内より一巻と

白雲の巻

竹屋より一巻と

源氏より一巻と

中二の巻

りやう

あつたこの一巻のありきなり

同じの巻より一巻と

并れより一巻と

中二の巻

の中より一巻と

うやむや

あつたこの一巻のありきなり

あつたこの一巻のありきなり

あつたこの一巻のありきなり

あつたこの一巻のありきなり



あつしつとていふはわづらひにふかぬとよ  
くちのしんがくはしつとていふは  
しつとていふは

りふつとていふは じつとていふは  
つとていふは

あつしつとていふは じつとていふは  
つとていふは

あつしつとていふは じつとていふは  
つとていふは

あつしつとていふは じつとていふは  
つとていふは

あつしつとていふは じつとていふは  
つとていふは

あつしつとていふは じつとていふは  
つとていふは

あつしつとていふは じつとていふは  
つとていふは

あつしつとていふは じつとていふは  
つとていふは

あつしつとていふは じつとていふは  
つとていふは

断腸是秋天 壬戌

あつしつとていふは じつとていふは  
つとていふは

いひかへし終の一人のさし

文のあゆみ 白文のさしあり

この書方此中將者 廿二巻此女房へ

積あふのさしや 白文のさし終り

小やうて女房の名は終りといはるの

ゆゑに終りといはるのさしあり

い書終りあり 廿二巻の書方終り

さしといふ物なり 人のさしあり

さしといふものなり 人のさしあり

りりりりり 諸語曰雜平式有恒矣

いひかへし終の一人のさし 中巻此

いひかへし終の一人のさし

いひかへし終の一人のさし

例のさしあり 廿二巻此女房へ

いひかへし終の一人のさし

いひかへし終の一人のさし 中巻此女房へ

いひかへし終の一人のさし

いひかへし終の一人のさし 廿二巻此女房へ

いひかへし終の一人のさし 抱仙室

いひかへし終の一人のさし

いひかへし終の一人のさし

いひかへし終の一人のさし

あはれいふにせらるるやハゆへい。 是を抱

仙窟よいさゆへハ先のこころと云は

こころをさしゆへハ女三三三流見まはる

ゆへと女房のこころをさ

まろく母方のあらしり

の容 貌 似 舅 潘 安 仁 外 甥 氣 調 如

兄 崔 季 瑋 之 小 妹 抱 仙

は問答皆遊仙窟の詞にゆへハ女三三三

ゆへにあらしとゆへとゆへとゆへと

ゆへとゆへとゆへとゆへと

例のあらしゆへ 中文の流るる

あらしゆへと 秋り律ふゆへと又女

あらしゆへと律あり

ゆへとゆへと人あ 物もゆへとゆへと

あらしゆへと 女三三三の流るるあり

あらしゆへと 女三三三ハ朱雀院の流るる

あらしゆへと 今の上の流るるあり

ゆへとゆへと 女三三三流るるあり

あらしゆへとゆへとゆへとゆへと

ゆへとゆへとゆへと

あらしゆへとゆへとゆへと 玉ゆへと

ゆへとゆへとゆへとゆへと

いしやあまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ

あまのこころをたのしみ人ぞ



あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

あつちのうら

らお

春と名を記帳し一号とてよき  
とらう一前とありいまこのころ  
とくげうよのまのりあ日げうりい  
巻とせうとさこの巻れうせし三目  
のりの事とせりるの二十六巻  
三月下旬より二十七巻のままで  
のりみしきり

ふれよ川よ 横川恵心院の徳信僧都

ふゆとくちり 月花を

いりくと 恵心院の妹安養の尼と

つひ一人ありて是を御所とす

ありて御所とす 無名信朝の母御所

の御所は靈臨ありて信朝とす

わし花をよみぬらんよめありあれ

ハ御所よまことけりともるじりて

いりてれり母のりりてしよとす

かよりして書海ありいづくの御所と

書海けりいづくの御所と

見よけりし 金峯山精進より後

乗出庭前礼お金峯山百座とす

宇治の院といひて 天慶八年十月

十八日朱崔院 宇多 庄牧勅文云宇

治院 菅原庄被留後院今葉朱

崔院八寶平法皇よりありて是といひ

より此朱崔院よりありてあり

是八平赤院のりて作せの書とす

有るりのゆふな 宇治の院の御所は

おまこととすあやむゆめをりり

より野をりりて

よりなるるゆめをりて 宇治

院といひて信朝の御所といひり

御所といひり

あし衆のうもあしと 法師りまはく

つむり力のときさくらめりえりこ

まほひれ人よるんげらると首より同と

女通の中し神境通とつよのありき

小娘通執通神通をいふる別あり

狐狸をいふ人は愛と縁とハ姑通と

云りて歎くてあるハ希有て人よる

おの娘怪りり通と云く又おるをいふ

小のりててをいふはつと執通と云く

これ因縁よりておとあつとていふ

執とめつとていりて果執の通と

えん聲同菩薩佛をいふの通と神

通と云はは七世の修験いりてぬて

えん神愛不四依りり通とて中

小二宗の通ハ菩薩及ん菩薩

通ハ佛よ及んぬ道徳めつとていり

見けり前 浄厨子前ハ食物と調す

阿んら私たて穢すかんて

井よりよりをいふはよ へんおのりぬ

ゆらひひらひめりあり

えんや思ん 法師のつて愛化の物

えんよとやうく見しれりかへし

ひさぎ

遊生

こゝろ

何 樹津

不神を書く

あまのよ

あまのよあまのよあまのよ  
いんじんあま

あまのよあまのよあまのよ

あまのよあまのよあまのよ

あまのよ 朱の盤と云珍物徳よあり

文珠様の目より鬼れりよあま

あまのよあまのよあまのよ

あまのよあまのよあまのよ

聖日あまのよあまのよあまのよ

人よとて

被逐あまのよ

或被悪人逐

片車あまのよ

片車のあまのよ

あまのよあまのよあまのよ

被逐

あまのよあまのよあまのよ

あまのよあまのよあまのよ

あまのよあまのよあまのよ

あまのよあまのよあまのよ

あまのよあまのよあまのよ

あまのよあまのよあまのよ

迷人應る水

樂有る遊生

二日... 定後院... 二

日... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

... 日

此の如くは 法華經云佛種從緣

起ると案一切色は諸法の種子と

ハ才ハ阿頼耶識は含藏より深浄の

縁より起るひて現起して佛と云生

うと起るは有りともハ有る未だ種也

比由ありの縁よりして生長をうと

種ありとも縁をけして現起を云

薩の慈悲より由よりよき其の

翁因をけして起る引起る縁

と有りゆへに 佛の起るも薩

无より佛に起るは因あり

て佛も善成を引起る縁と縁也

有りぬきよと云るなり

じまんの 無慚有り

やる戒ハ 戒と御するゆへに

と有り海海の縁と云ん

あり起るよと云ひて 初者此也

有りて平生の修習の縁とい時

起りけして初まり

有りて 物の字縁より起る

よのハ爰まで 有りての詞

有りて法師の 無慚信正の

何海かあつとていふは見らる御をいふ  
 しめあつたおとあつたけいあつた物  
 せいせい せいせい せいせい  
 せいせい せいせい せいせい

おおの目よ 六月の月よ  
 中しつゝおつたは 君君の  
 中しつゝおつたは 君君の  
 中しつゝおつたは 君君の

一とあつたは せいせい  
 せいせい せいせい  
 せいせい せいせい  
 せいせい せいせい

あり八月十日未三よのうら  
 誇人のまゝあつたは  
 竹ねはつたは  
 いあつたはあつたは

大尾の事あり  
 娘の居着いんがらのせい  
 せいせい せいせい  
 せいせい せいせい

せいせい せいせい  
 せいせい せいせい  
 せいせい せいせい  
 せいせい せいせい



母ののりありいほお母れとてはりく

しこい母のふれ云ほほん

ういふもあつ いましの父ほ母のふ

おしうてまひせしめてしうほ

ほくを

少ねの居る 少節はほくふ人あり

しーてあふりし ほ母れふ

ふくて夢世中し 月の都いさ起

のるほり

まゐるまよ無あつて ち

都の人いんて 都をてい

こまらりす又たろよんありや

やこまら海ほくまると都をてい

まゐるまよ無あつて

在中よりぬあ 世中のあぬあ

ていぬ年をうてあつていん

孫仲若 聲れ中將の才あり

まゐるまよ無あつて 中將も小随力

のしうてふりりて 前中よ

教しれあり

まゐるまよ無あつて ち

まゐるまよ無あつて

よきよきとておぼしめし

うらやまのついでに 貴方の御

お母の御おぼしめしを

おぼしめしおぼしめし 中將を

うらやまのついでに

うらやまのついでに 中將を

うらやまのついでに

うらやまのついでに 中將を

うらやまのついでに

うらやまのついでに

うらやまのついでに

うらやまのついでに 中將を

うらやまのついでに

うらやまのついでに

うらやまのついでに

うらやまのついでに 中將を

うらやまのついでに

うらやまのついでに

うらやまのついでに 中將を

うらやまのついでに

うらやまのついでに 中將を

うらやまのついでに

那美ハ ほうまゝにまゝにわらへんたの昔

の女たのむくつあつて新しき

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

いびくらの息ろりぬ

親のあらし 中ねのちやれりん

うあらしあらしうあらしうあらし

うらひあざりりか世法より

世法控と 中野の尾と

事法りのきり

髪りあくたうーうあらし人の 尾毛

うあしのあざりりか世法より

うあらしあらしうあらしうあらし

尾毛のあらしうあらしうあらし

うあらしあらしうあらしうあらし

うあらしあらしうあらしうあらし

うあらしあらしうあらしうあらし

うあらしあらしうあらしうあらし

うあらしあらしうあらしうあらし

うあらしあらしうあらしうあらし

うあらしあらしうあらしうあらし

うあらしあらしうあらしうあらし

うあらしあらしうあらしうあらし

うあらしあらしうあらしうあらし

うあらしあらしうあらしうあらし

うあらしあらしうあらしうあらし

とらめてあつらふしかうらめし  
ましとせしむるをいひて

あやぐさひついであつらふ人になしし 聲  
の中將のありあり

あつらふとせしむるをいひて 又のいへ

いひていひていひていひて いひていひて

あつらふとせしむるをいひて

例の尾よみいひて かの尾のいひ

あつらふとせしむるをいひて 誰かよみいひ

あつらふとせしむるをいひて

あつらふとせしむるをいひて

秋とせしむるをいひて 中將とせしむる

あつらふとせしむるをいひて

あつらふとせしむるをいひて

あつらふとせしむるをいひて

あつらふとせしむるをいひて

あつらふとせしむるをいひて 中將のいひ

あつらふとせしむるをいひて

あつらふとせしむるをいひて

あつらふとせしむるをいひて

あつらふとせしむるをいひて

あつらふとせしむるをいひて

うめあり 花と月と中しすれ  
女節をうらまはせぬのふしよき  
くまをくはらふことと云く鴉字え  
世にあり せりあると云ゆし  
中しすれ人とりあり

秋分らうまつるはすしはまよ  
是くまつるのふれ初の中將  
はましはまつるくしりりんえ  
秋のふれと見え 女と出したと  
きりしをうし周しりハまはせとく  
云ちわたりハなれおえやりりく

秋の野はあまのけさあり 花と月と  
じくの音と早下のふえとまよとま  
のあのをとあふととらふしり  
あまのふれとあまのふれと  
うめありとまよとまよとまよと  
とよハサお尾のし葉あり  
うらあり 是りハ双葉のたまりの  
日とまよとまよとまよのふれとまよハ  
まよとまよとまよとまよのふれと  
くまをくはらふことと云く鴉字え  
うらありのふれとまよハ

尾上似分ととめくえぬ母の御ん

麻のちくまし あ 乙未秋より乙未の

しは麻のちくまし目録さまじつ

ゆとんくらあき あ 乙未秋

乙未一方のちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

あめくし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

ちくまし あ 乙未秋

うらみの月夜あはれし。 戸をた

うらみの端らうらうらうらうらうらうら

ぬやうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら

あはれうらうらうらうら 戸をたうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうら 移居の板を

うらうらうらうらうらうらうらうら

きんの琴引おへ 大元の女は

うらうらうらうら

くらうらうらうらうら 世のうらうらうらうら

うらうらうら

うらうらうら 大元の女は

うらうらうら 大元の女は

きんとうらうらうらうら 世のうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうら 中元の夜は

うらうらうら 大元の夜は

うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうら

うらうら



ともしもはあはれしくしてのんくといひのん  
なつかしくもあはれしく中しくあはれしく

今もあはれしくあはれしく中しくあはれ  
てあはれしくあはれしくあはれしく中しくあはれ

あはれしくあはれしく

おとまり 嬭ウツ字々 志女のつらみ然ハ昔ハ

和装今もあはれしくあはれしくあはれしく

ともしもりのくそ 志殿あはれしくあはれしく

あはれしくあはれしくあはれしくあはれしく 志のあはれ

とあはれしくあはれしくあはれしくあはれしく

後後遺 志のあはれ 志のあはれ 志のあはれ 志のあはれ

あはれしくあはれしくあはれしくあはれしく 志のあはれ

あはれしくあはれしくあはれしくあはれしく

あはれしくあはれしくあはれしくあはれしく 中將のあはれ

あはれしくあはれしくあはれしくあはれしく

あはれしくあはれしくあはれしくあはれしく 志のあはれ

あはれしくあはれしくあはれしくあはれしく

あはれしくあはれしくあはれしくあはれしく

あはれしくあはれしくあはれしくあはれしく 志のあはれ

あはれしくあはれしくあはれしくあはれしく

あはれしくあはれしくあはれしくあはれしく 志のあはれ

あはれしくあはれしくあはれしくあはれしく

萩の葉あしやうぬりよ　　ふおつたけ

ふおつた萩の風吹くよ　　ふらふらと

ふらふら

けしきよらふら　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

命さくふらふら　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

ふらふらと　　ふおつた萩の風

うき世の心もなつかしき  
うき世の心もなつかしき  
と信ぶればのほろひし  
秋の風はうらぬまきし

玉ふき涙あはれ  
いとしとせぬ

あひおのりあひこし  
あひおのりあひこし

今も秋の夕ぐせ  
早下のよはの静けさ

行くあき ちかきあき

清らさしむらさきも  
あきあきあきあき  
あきあきあきあき

らむの秋の風もあき  
あきあきあきあき  
あきあきあきあき

あきあきあきあき  
あきあきあきあき  
あきあきあきあき

にさしりてはかたじけなくも  
おもしろくもなれりしは公に  
かたじけなくもなれり

うぶのこころは 心の中おれれりし  
やねたの御よあなをいましてつとまき  
はかたじけなくもなれりしは公に  
かたじけなくもなれり

一はあつらひて 昔かたじけなくと  
すまはれりしは公に  
かたじけなくもなれりしは公に  
かたじけなくもなれりしは公に

ふたつはこころのなかみ  
かたじけなくもなれりしは公に  
かたじけなくもなれりしは公に  
かたじけなくもなれりしは公に  
かたじけなくもなれりしは公に  
かたじけなくもなれりしは公に

かたじけなくもなれりしは公に  
かたじけなくもなれりしは公に  
かたじけなくもなれりしは公に  
かたじけなくもなれりしは公に  
かたじけなくもなれりしは公に  
かたじけなくもなれりしは公に

らう方うらうらめ つかふれ申

よしめりらめあしめ ちののり

人うらうらめし ちのまじらひ

まのおぬらうらめいぬらうらめ

あうらうらめいぬらうらめ

かしめー 覆字なり

うらうらめいぬらうらめ

のうらうらめいぬらうらめ

うらうらめいぬらうらめ

うらうらめいぬらうらめ

うらうらめいぬらうらめ

うらうらー ちのうらうらめ

うらうらめいぬらうらめ 今と女一宮

うらうらめ 久きうら

うらうらめ ちのうら

うらうらめ ちのうら

うらうらめいぬらうらめ

うらうらめいぬらうらめ

うらうらめいぬらうらめ

うらうらめいぬらうらめ

ちのうらうらめ 世家のうらうらめ

うらうらめいぬらうらめ 信那のうら

くのあつてもれやまういけりなり  
一のりいりなり

ゆりきりして今もまういけりなり  
きよきよのまういけりなり

物のちのいなり ちのまういけりなり

信のゆりあはせぬいけりなり

ちのまういけりなり

之をいけりなり 佛法信く之を

とくもいけりなり

まゆりあはせぬいけりなり

いけりなり

車やういけりなり . . .

あかりいけりなり

いけりなり

いけりなり

いけりなり

いけりなり

うしんいけりなり

いけりなり

いけりなり

いけりなり

不能断棄息入を為真實報恩者

あつたにせうと かくとせうと

いふにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと

あつたにせうと かくとせうと





まの足ゆかり　よおれあまの居るあり

し後信都はいま少将の居るあり

めんち一足と一足とわ

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

とまの足とやゆらん　少将相つ祀り

あまの足と信都はいま少将の居るあり

まのの中より　新女お供はあま

あまの足と信都はいま少将の居るあり

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

まの足とやゆらん　少将相つ祀り

しきこえりハ清々なり

けつらひのやしやけしそりきりせ

のわら若れ世のこりきりきりきり

くろくくろくくろくくろくくろく

ちやうりしき

命ハ葉のうとと

顔色如若命ハ葉薄 陵園妻

是ハ若思のうとと

つらハ命ハあはれりきりきり

おきんよ曉りて月をいかりし

松門曉到月能回栢城晝日風

蕭瑟 下の詞は吹風の多きを

いかにい詞をいひり陵園妻ハ女なり

と若思ふもあつたけりし陵園の女

せりりてつとくし人なりあわの若れ

けしけりしつとくし

山伏ハ向日と移りけりし は師

あはれとあはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれとあはれと

てきり ありきりきりきりきり

けりしけりしけりしけりし

もりの方よきとく 信都をよわ

下給ひおしめ

のいさしり おまへ ぼけれおまへ

まよしんらひあふんと おまへ若

おまへ居しありおつくと歎くや

らゆありて 中おの目し程ららり

ハきりしおれひあけまへし程らり

いひあまへし程らり

不指の吹舟一の 居まれ方のおまへ若

のりさしんらひあふんとあり

らんらあしすこまへおまへ

ありらりしんらひあふんとあり

あまへしんらひあふんとあり

かまへまへおまへ 月しんらひあふんとあり

いしんらひあふんとあり 中將のつと

いしんらひあふんとあり 中將のつと

いしんらひあふんとあり 居まれのつと

いしんらひあふんとあり 中將のつと

いしんらひあふんとあり 中將のつと

いしんらひあふんとあり

いしんらひあふんとあり

いしんらひあふんとあり

いしんらひあふんとあり

まは那しむくやうなれは久し居る

ちやいせりよき

まや若れ <sup>の</sup> 月やあぬまやじしき

ちりりぬ

かしの海く ころはゆいなる

ちたのじまはれさ ねとね

けしきき ちたのりひていさひ

まじしよめれあれちりひさう

むららのさうハ ねちちいりささる

のまはまし父のうらあん

や一月うて 厄若れもなる

まきらつひねまきまハちたの

まきれのりりどねんや

まやのふし ちあは若のいそ

ちちね後 ちかのりなり

ちちねしてりさ 周忌のりさ

この寺の律師 ちたのあさりたる

女のさくさく 信の施世のさあはら

ちのめいさうりさ あひまはれ

はちあまもねよこりさ

ちたの事ありあひまはれの若

別ありのほのりりなり

くよのひつねひて 水のりらりや  
くらく入るまきり

くくわしけり 伝ちうりて 傳よ  
やせしなはらりのまきり

らのそり 用日の侍申こ  
んち伝後とのぬくし 伝ちうりて

音しんりまきり

あまきりやしんり 伝ちうりて  
くすれぬまきり

のひつねひのまきり  
ん衣しんりや 伝ちうりて

あまきりやしんり

昔のまきりしんり 下のまきり

あまきりしんり 母のまきり

昔傳のまきり 伝ちうりて

くくまきりしんり

伝ちうりて 伝ちうりて

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた



おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

おのれの中をいふはたはた

のほろむまじりまじりしるるるのほろ  
まじりしと中まじりねんまじり

みまじりのほろまじりのほろまじり  
のまじりしと中まじりねんまじり  
まじりしと中まじりねんまじり

まじりしと中まじりねんまじり  
まじりしと中まじりねんまじり  
まじりしと中まじりねんまじり  
まじりしと中まじりねんまじり  
まじりしと中まじりねんまじり

のほろまじりまじりしるるるのほろ  
まじりしと中まじりねんまじり

まじりしと中まじりねんまじり  
まじりしと中まじりねんまじり  
まじりしと中まじりねんまじり

まじりしと中まじりねんまじり  
まじりしと中まじりねんまじり  
まじりしと中まじりねんまじり

まじりしと中まじりねんまじり  
まじりしと中まじりねんまじり

まじりしと中まじりねんまじり  
信都のまじり







夢浮橋

竹春成身浮橋と題す事初ま方  
少も月くとい物後れおりまてく  
多けり言はらるあはれくも  
速のこりりあへり感者必裏の速  
くともんああり今の題目は  
すり有世の諸法りまて身よあ  
あはれくあはれり涅槃云生死を  
常行妙身と説き因覚經云始知  
前生本来成佛生死涅槃行如昨  
夢とてくあはれ

抑も春名り凡身とてあはれり浮橋小  
別の心形一世中八夏の後の浮橋とて  
云りあはれり又も浮橋の心とて  
あはれりくしい春成身とてあはれり  
候もあはれり一生は間もあはれり  
とて或は陰陽とて成てくあはれり  
ゆり或は音階とてあはれり  
りくあはれりよひくあはれり  
ひあはれりあはれり後少野とて  
まて夏の心とてあはれり  
同くあはれりあはれりあはれり

終に此馬のまをばくばくして  
あつし似たりい候むいまゝおつた  
又云一部の名し何れまり二巻の巻  
号し一巻の号始末しおけり世の  
新物皆言ふくくはりあし見ゆ  
はつらうし書二七巻の巻ハ  
まゝこののりまにまらうし  
ゆつて例をせはるし

八講をいれ終りしやとて其後  
川の信教の戸しきとせはるし  
しつらうしはるし  
申回し

まゝのり

あつし似たりい候むいまゝ

けつし似たりい候むいまゝ

はつらうし

あつし似たりい候むいまゝ

けつし似たりい候むいまゝ

はつらうし

あつし似たりい候むいまゝ

けつし似たりい候むいまゝ

はつらうし

あつし似たりい候むいまゝ

うらの名あり

魂殿ハ山作而休らへ後漢書小呂布の  
山後と傳りて赤眉の堂百十七此れありと  
河海東院料しむるりまの河海ぬ院  
多とありとまのせん人のとまの  
ハとて人の死と休まて入推て  
大庵をたふとありとありて  
ふとてありとありとありとあり  
ふよひてありとありとあり

難波沙子 仁徳 と其沙ありと

菟道稚子 ヤサキ あり沙又 森

沙信とらつらつありとありとあり  
つとありとありとありとあり  
みありとありとありとありとあり  
たありとありとありとありとあり  
又ありとありとありとありとあり  
みありとありとありとありとあり  
ハとらつらつありとありとありとあり  
のりとありとありとありとありとあり  
りつとありとありとありとありとあり  
ありとありとありとありとありとあり  
ありとありとありとありとありとあり



扇の水の重なり  
みちのふらふらと  
とりの車馬を  
とほくと又之い  
ましめりひ  
例のころん  
乃このの事  
かくりして  
元は  
おまひよ  
あひ相

まゆみ  
乃れ  
月日乃  
なま  
い  
中し  
と  
か



うや 何れや 中らうのそらうり 勢 破

うや 何れや 中らうのそらうり 見処有り

うや 何れや 中らうのそらうり 中らうのそらうり

うや 何れや 中らうのそらうり 中らうのそらうり

又うや 何れや 中らうのそらうり

うや 何れや 中らうのそらうり 中らうのそらうり

うや 何れや 中らうのそらうり 中らうのそらうり

又うや 何れや 中らうのそらうり

うや 何れや 中らうのそらうり 中らうのそらうり

又うや 何れや 中らうのそらうり

うや 何れや 中らうのそらうり 中らうのそらうり

うや 何れや 中らうのそらうり 中らうのそらうり

うや 何れや 中らうのそらうり 中らうのそらうり

又うや 何れや 中らうのそらうり

うや 何れや 中らうのそらうり 中らうのそらうり

うや 何れや 中らうのそらうり 中らうのそらうり

又うや 何れや 中らうのそらうり

うや 何れや 中らうのそらうり 中らうのそらうり

記者此 何れや 中らうのそらうり

うや 何れや 中らうのそらうり







